

九州島の「細石器文化」

—九州島における細石刃石器群(1)—

橋 昌 信

はじめに

九州島における細石刃石器群の時間的位置づけでは、位牌塔型、茶園型、野岳・休場型などの稜柱系細石刃核がほぼ単純に組成する遺跡・石器群が最古段階と理解されており、その時期については長崎県茶園遺跡V層15,450±190B.P.（補正年代）・熊本県河原第3遺跡VI層14,660±70B.P.（同）の放射炭素年代（芝 2010）から約1,6～1,5万年前とされる。

一方、日本列島の北に位置する北海道の細石刃石器群の出現は、2万年前頃、シベリアからの削片系細石刃技法の伝播によるものと考えられており、さらに、九州島とは一衣帯水の韓半島における細石刃石器群の始まりは、2,5～2,4万年前にまで遡るような見解も見られる（金 2009）。北海道や地理的に近接する韓半島における細石刃石器群出現の時期と九州島のそれを比較すると、余りにも時間的な隔たりが大きいのである。九州と韓半島との間に横たわる水道が文化の伝播で障壁になっていたことは否定できないが、細石刃の生産技法が5千年間以上の長期にわたり九州島へ伝播・波及しなかったとは考えられず不自然さを強く感じるのである。

この不自然さの要因の一つは、西北九州地域をはじめ九州島で認められる小型のナイフ形石器・台形石器の存在、つまりナイフ形石器文化後半期の「細石器化」の動向が関与している可能性である。さらにもう一つは、九州島での細石刃石器群の出現は1,6～1,5万年前の稜柱系細石刃核に求められているが、その年代を遡る細石刃石器群の存在の可能性である。前者は九州・西南日本における石器群構造の問題であり、後者は細石刃石器群の変遷およびその時期についての認識の問題である。要因の性格は異なるが、この2点は九州島の細石刃石器群の出現・展開に、しいては後期旧石器時代後半から終末にかけての石器群構造の多様性に関わることで、互いに連鎖していると考えられるのである。

拙稿では、九州島における細石刃石器群に関する諸問題として、前者のナイフ形石器・台形石器の細石器化の可能性について試みる。

1. ナイフ形石器文化後半期における組合せ道具

小型のナイフ形石器や台形石器が組合せ道具として使用された可能性について、『原始・古代の長崎県』の通史において述べた（橋 1998）ことがあるので、最初にその一端を触れておく。

「小形で二側縁に加工が施されたナイフ形石器、形態や製作技法に斉一性が見られる小型の台形石器の存在、それに百花台遺跡Ⅲ文化のように単一の器種構成、また神の池遺跡の石器組成など、これらの石器群の特徴はいずれも組合せ石器の用途を想起させ、来るべき細石器文化との連続性や指向性を示唆するものとして考え、ナイフ形石器文化第4期は次の細石器文化への準備段階と見なされよう」

続けて「……西北九州地域で組合せ道具の新たな刃部の石器として、しかもそれは刃潰し加工の調整でなく、折断のみの調整で製作される小さな石器—細石刃—として登場した。しかしながら初期の時期ではその大半がナイフ形石器文化終末の既存の小形のナイフ形石器・台形石器を主要な組合せ道具とする文化に吸収されたことが想像される。すなわちシャフトと刃部としての石器を組み合わせたという細石器文化の新しい使用法は短期間で受け入れられるが、細石刃を刃部に用いた本来の組合せ道

具としてはほとんど発達しなかったと考えられないであろうか」。

ナイフ形石器・台形石器を刃部として用いた組合せ道具と細石刃石器群との関係について、組合せる使用法は受け入れられるが細石刃生産は定着しなかった要因に、ナイフ形石器・台形石器などの小形化・細石器化が組合せ道具の刃部として対応したとの予察を行ったのである(註1)。つまり、細石刃の生産技法が定着する前に組合せ道具の使用法が導入・受容され、西北九州・九州島で顕著な小型で定形化したナイフ形石器や台形石器の細石器化の発展を促し、それに連鎖して九州島・西日本地域では列島の北の地域で認められるような「細石刃文化」が発達しなかったと言うのがこの時点での予察である。

このシナリオについては、列島の北と南の自然環境・生態系の相異に基づく生業戦略・石材運用などを含めて今後検討を重ねなければならないが、九州島における後期旧石器時代研究の初期、1963年に実施された佐賀県原遺跡の発掘調査や笹の尾遺跡など周辺遺跡の調査で、細石刃石器群とナイフ形石器・台形石器との共伴について問題提起が行われているのである(戸沢・富樫 1962)。(第1図)。

原遺跡A・Bの両地点で西北九州産黒曜石を主要石材にした細石刃・細石刃核と共にナイフ形石器・台形石器等が出土し、示準石器の変遷の視点からすれば、時期の異なる両者の石器群をどのように理解するかが問題視された。共伴するのか、それとも新旧の石器群が層位的に重複しているのかである。その検討の過程でナイフ形石器・台形石器の小形化・多様化、あるいは細石器化の様相がクローズアップされ、細石刃とナイフ形石器・台形石器の共存の可能性が提示された(杉原・戸沢 1971)。

この原遺跡の調査とほぼ同年代に実施された長崎県の福井洞穴や百花台遺跡における石器群の構造も、西北九州の細石刃石器群の理解で重要な役割を果たしている。福井洞穴(岩陰)では2・3層で楔形細石刃核による細石刃石器群と爪形文・隆起線文が施文された土器との共伴が初めて明らかにされた。その下位の4層では土器を伴わない細石刃石器群が、さらに5・6層の間層を挟んだ7層から小石刃などが出土した(註2)。しかしながら、4層・7層のいずれの層からもナイフ形石器・台形石器は発見されなかったのである(鎌木・芹沢 1965)。一方の百花台遺跡では、細石刃石器群がⅢ層から、その下位のⅣ層から台形石器が出土し、層位的に台形石器⇒細石刃への変遷が明らかにされた(麻生・白石 1976)。台形石器は小石刃を折断し、側縁に調整加工を施して定形化した小型が特徴で「百花台型台形石器」として知られている。

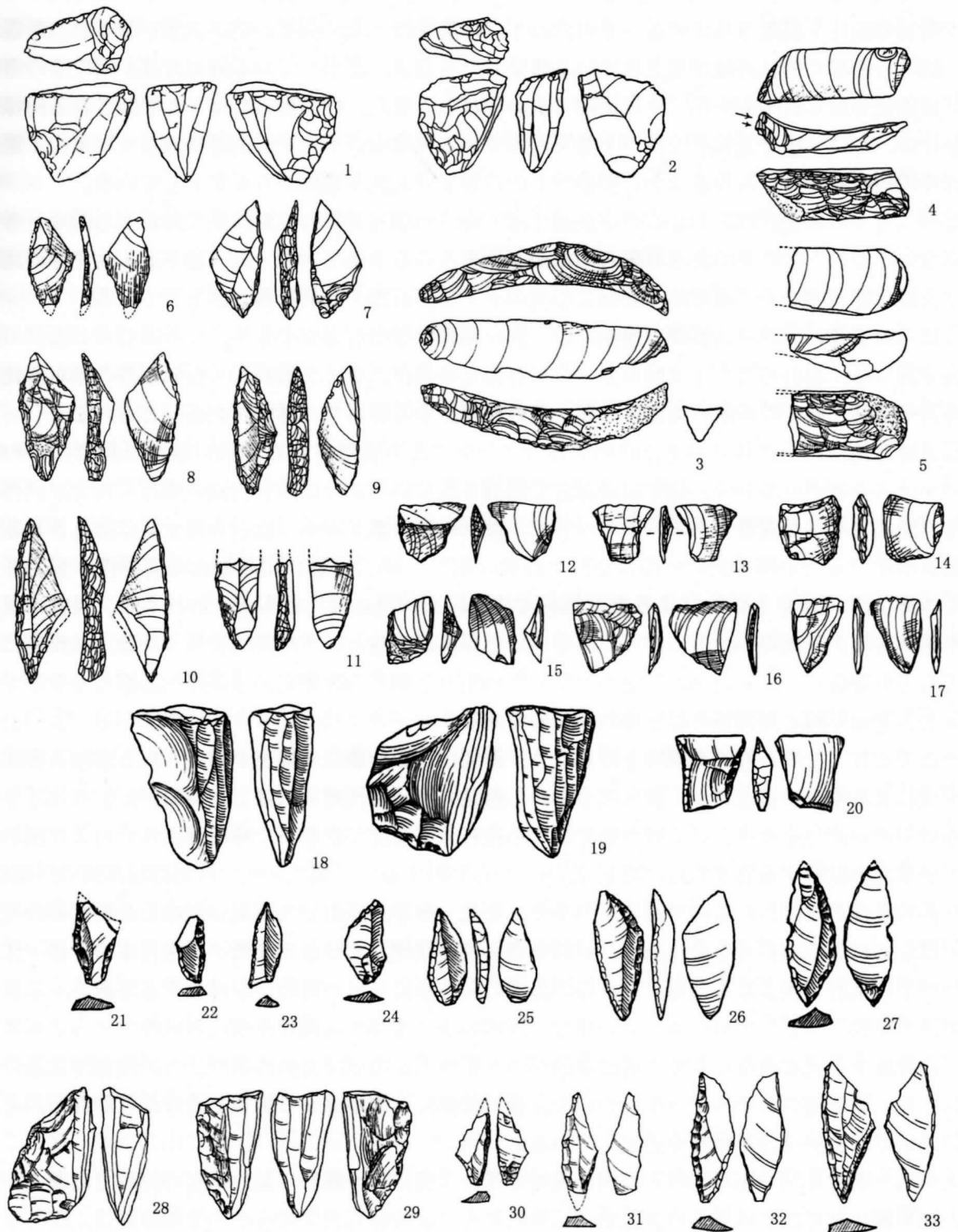
1960年代前半に実施された福井洞穴および百花台遺跡の調査結果から、ナイフ形石器文化終末から細石刃石器群にかけての時期では特定器種にほぼ限定された石器群が存在することは注目されたが、ナイフ形石器・台形石器と細石刃とは共伴しないとの考え方が大勢を占めるようになる。

2. 西北九州における削片系楔形細石刃核

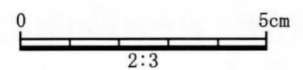
ナイフ形石器が細石刃と同様に組合せ道具のパーツとして使用されたかどうか問題提起された原遺跡の細石刃石器群に関連して、西北九州地域に顕著に認められる良質な黒曜石製を用いた楔形細石刃核の時間的位置づけについて、見通しを述べておきたい(註3)。

原遺跡の発掘および表面採集調査で発見されている細石刃核は、技術形態的な特徴から福井型・唐津型それに野岳型の三者が認められる。B地点の舟底形の体形を呈し、側面からの横打調整で打面が全体的に傾斜する楔形の細石刃核は「福井型」である。同じような楔形でより調整が整った両面体の舟底状で、背縁と作業面がほぼ平行し、残核が縦型を呈する細石刃核は削片系の「唐津型」(石ヶ元型)細石刃核と判断できる(註4)。

次に、細石刃生産の関連資料で問題視されているB地点の「打面作出・再生に関係ある資料」3点



1~17. 原遺跡 (B 地点) 18~27. 原遺跡 (採集資料) 28~33. 笹の尾遺跡 (採集資料)



第1図 楔形細石刃核・削片・ナイフ形石器・台形石器
(杉原・戸沢1971および戸沢・富樫1962より改変作図)

は、楔形細石刃核の打面形成に伴う削片と考えられ、2点は横打調整を施した後に、縦方向からの加撃で縦長の削片が剥離されている。その内の1点は削片の一端に細長い樋状剥離が施された彫器である。削片の端部に樋状剥離が施されている類似した石器は、出土している細石刃核が削片系の唐津型にはほぼ限定される唐津市中尾二ツ枝遺跡で認められる。また、打面形成に伴うと判断される同様な縦長削片は、やはり唐津型細石刃核が主体を占めている唐津市石ヶ元下道遺跡B地点や同東山I遺跡など唐津周辺で顕著に見られるほか、腰岳近くの伊万里市大光寺遺跡からも出土している。

このことから原遺跡出土の2点の縦長削片は、唐津型細石刃核の打面作出に関係する削片と考えて大過ない。なお、削片系の唐津型細石刃核が主体を占める中尾二ツ枝・石ヶ元下道・大光寺の諸遺跡では土器は伴ってなく、原遺跡と同様に小型のナイフ形石器・台形石器が出土している。

これらの遺跡における石器群の構造では、削片系唐津型細石刃核を主体にした細石刃石器群の時間的な位置づけ、細石刃とナイフ形石器・台形石器との共存、ナイフ形石器・台形石器の細石器化による組合せ道具としての使用の可能性など、互いに連鎖する視点での再検討が必要とされる。

原遺跡B地点出土の残りの1点は両面体のブランクから剥離された細長い断面三角形のいわゆる「ファーストスポール」で、40年前の報告で指摘されているように湧別技法の細石刃核作出過程の所産と判断出来そうな資料である。その一方で、楔形の福井型・唐津型細石刃核と共に散見される扁平な縦長削片の存在や福井洞穴の接合資料（橋本 1983）から、土器の出現期との関係性が想定されている西海技法（織笠 1991）による楔形細石刃核の打面作出の削片とも考えられよう。後者の理解は楔形細石刃核が草創期の土器に伴う、あるいは土器出現直前という時間的位置づけと、九州島における細石刃石器群が、1,6～1,5万年前の野岳・休場型から楔形の唐津型・福井型へと細石刃生産が変遷すると言う編年観と無関係とは思われないのである。

そこでこれまでの一般的な理解とは異なり、湧別技法との類似や関連が想定される削片系唐津型細石刃核による細石刃石器群が、韓半島南部から西北九州・九州島に伝播した時期が1,6～1,5万年前よりも以前の可能性を考えたい。韓半島で削片系細石刃石器群が盛行した時期（註5）および楔形細石刃核が華北へ拡散する第1回目の時期（註6）から判断すると、西北九州の楔形細石刃核の出現が1,8万年前の前後が推測されるのである。つまり、華北・韓半島経由で九州島へ伝播した削片系の楔形細石刃核などによる細石刃生産技法が、位牌塔型・茶園型細石刃核など九州・西南日本の野岳・休場型（稜柱系）細石刃核よりも遡り、それらの出現の引き金になった可能性が浮上するである。これだと原遺跡の断面三角形のスポールについても、湧別技法に関連する削片系細石刃核のファーストスポールとの認識も否定できなくなり、逆に草創期の土器や土器出現直前の西海技法との関係性は遠のくことになる。原遺跡のこのスポールについて、張（2010）は韓半島から影響を受けた可能性と、その時期については1,8～1,5万年前を想定している。

九州島・西北九州の細石刃核の技術形態的変遷が「稜柱系⇒楔形・削片系」の流れではなく、この逆の編年観に立てば、削片系の唐津型細石刃核などによる細石刃生産技法の出現時期は、限りなくナイフ形石器文化後半期に接近し、九州島の後期旧石器時代後半期から終末期にかけて、細石刃とナイフ形石器・台形石器の細石器化で構成される新たな細石器文化での石器構造が見えてくるのである。

3. 細石器としてのナイフ形石器

原遺跡の調査で注目された細石器としてのナイフ形石器の特徴は、素材が刃器・刃器状剥片、素材を切断するような技法、4 cm以下の小形のものが主体、形状のバリエーションの4点に要約される（杉原・戸沢 1971）。これらの特徴あるナイフ形石器は楔形細石刃核・削片が出土しているB地点でより

顕著であり、小型ナイフ形石器と素材および加工技術が共通する台形石器も同様である。原遺跡の調査で提起された楔形細石刃核などによって生産された細石刃と同様な組合せ道具としての使用法は、小型のナイフ形石器や台形石器での蓋然性はどうか。

これに正面から向き合った論考の一つに、タイトルもずばり「小型ナイフは組み合わせ石器か？」(松藤 1989)がある。AT 降灰後のナイフ形石器文化後半期の九州島で集中的に発見されている剥片尖頭器が韓国の接触によるものとの理解から、日本列島での細石刃の出現に先立って、組み合わせ石器の情報を入手する機会があったことや、一部の地域でその情報が入っていたことで短期間に西日本で細石刃が拡散したのではないかと、言う見解である。ナイフ形石器文化後半期におけるナイフ形石器の小形化を積極的に評価し、細石刃生産と関連付けた組み合わせ石器の存在を想定した見解は重要視したい。

細石刃石器群との関係性は触れていないが、白石(1978)は西南日本のナイフ形石器終末期の様相について「ナイフ形石器が小形化し、幾何形化して、そして細石器化しているといつてよいであろう。これらの石器は単独では使用せず、複数の石器を組み合わせる道具とする所謂 Composite-tool と考えられている」と組み合わせ道具としてのナイフ形石器に早くから注目している。

これらと同様な認識として「西北九州のナイフ形石器群最終末に特徴的な石器群の構造、すなわち、小形化志向・石器の形態的統一・組み合わせ道具の開発が、細石刃石器群の発生に深く関与するものと考えられる」、「組み合わせ道具として使用することにより、ナイフ形石器の各形態と同じ機能をもつことができたのである」(萩原 1979, 下川・萩原 1997)がある。具体的な遺跡・資料として百花台型台形石器や平戸市神の池遺跡で出土している幅広短形の小形石刃について、細石刃のような使用法を想定している。傾聴に値する興味深い視点である。

細石器化で常に小型のナイフ形石器と共に組上に上がる台形石器、特に百花台型台形石器は西北九州で顕著に認められているが、近年、鹿児島県仁田尾中A・B遺跡、桐木耳取遺跡、宮崎県野首第2遺跡など南九州地域においても好資料が知られており、小型のナイフ形石器と台形石器の存在を南九州のナイフ形石器文化終末期の特徴として上げている(鎌田 2004)。台形石器と小型のナイフ形石器、それに細石刃の三者については、遺跡・出土層位あるいはブロック(エリア)内での石器組成や主体をなす石器群の在り方は必ずしも一様ではなく、ナイフ形石器と台形石器が共に見られるケースもあれば、細石刃とナイフ形石器が組成し、台形石器が認められない場合、さらに細石刃がほぼ単純に認められるなど複雑な状況を呈しており、より限られた短い期間での石器群構造の変容が予想される。ナイフ形石器・台形石器の細石器化に連鎖する組み合わせ道具の刃部としての可能性は、西北九州地域だけでなく九州島全域におけるナイフ形石器文化後半期から終末期にかけての普遍的な現象として、また石器群構造の多様な在り方としての理解が不可欠である。

ところで、西北九州での細石刃生産に関して「磯道技法がナイフ形石器群最終末まで残存し、扁平細石核へ発展」(萩原 1995)との見解がある。ナイフ形石器文化の連続として細石刃石器群の出現を位置づけることは可能であろうが、周知のように「細石刃」を刃部とする組み合わせ道具は、後期旧石器時代後半に東北アジア一帯に認められており、西北九州で独自に発明された可能性はまず考えられない。地理的に隣接する韓半島では2万数千年前に既に存在しているので、九州島ではやはり韓半島からの影響が想定される(註7)。韓半島からの細石刃石器群の伝播・波及では細石刃生産技法だけでなく、それ以前に一剥片尖頭器や三稜尖頭器・角錐状石器などが伝播した時期(註8)―組み合わせ道具としての小形の剥片石器の使用法が直接的あるいは間接的にもたらされ、九州島の各地域では既存の石器群や石器生産技術、在地石材を運用しながら選択・受容した可能性が高いと考えられる(註9)。

西北九州地域での対応の様相が、先に述べた原遺跡などに認められるナイフ形石器・百花台型台形

石器などの細石器化や断面三角形の削片・縦長削片から推測される湧別技法類似の削片系楔形細石刃核の存在に発現されていると見なせよう。福井型細石刃核とは異なる技術形態的な特徴も認められる楔形をした削片系の唐津型（石ノ元型）細石刃核は、韓半島南部と距離的に最も近い唐津周辺に集中的な分布が認められ、しかも、この削片系の細石刃核が出土する遺跡では小型のナイフ形石器や台形石器が伴う傾向が顕著なことも、無関係とは思えないのである。いずれにせよ、原遺跡は後期旧石器時代後半期から終末期における九州島各地域における様々な対応の一つの姿と見られる。

韓半島からの新技術の伝播・波及は九州島各地における既存の石器群に影響を与え、各地域の石材運用を基軸にした技術的な応用や変容が、九州島におけるナイフ形石器後半期における石器群構造の多様性に拍車をかけたものと推測される。この石器群に認められる多様性は西北九州から南九州へほぼ同時期に波及したものを考えられ、さらに、西日本地域への拡散も予想されるのである。

次に組合せ道具としての使用法や細石刃の生産技法などを通して関連が示唆される韓半島と九州島との交流について概観しておきたい。

4. 後期旧石器時代後半期における韓半島と九州島との交流

後期旧石器時代の後半期における九州島と韓半島との交流で、松藤（1987）は韓半島で発達している剥片尖頭器について「海を渡った旧石器」として注目した。さらに最近、佐藤（2010）は「剥片尖頭器の導入にやや遅れて、これも朝鮮半島の細石刃石器群の一員であった船底形石器を狩猟具に改変した角錐状石器を導入している」と見解が見られ、いずれも韓半島と九州・西南日本との深い関連を指摘している。細石刃石器群では小畑（2008）は楔形をした削片系細石刃核である「石ヶ元型」（「唐津型」）について「故地は石器組成や地理的分布からみてこの地域以外に求められない」と韓半島南部からの伝播を、その時期について野岳・休場型よりは新しく、1,3～1,5万年前を超えることはないであろうとの考えである。

韓半島との交流に関して、スヤンゲ遺跡では先に上げた剥片尖頭器・角錐状石器、それに湧別技法類似の削片系細石刃核をはじめとして各種の細石刃核が多数発見されており、これらの石器群は共存する時期があったと考える。細石刃石器群には福井型・唐津型の楔形細石刃核や船底形を呈する船野型細石刃核に類似するものも存在する（李・尹 2005）。また、韓半島南端部の月坪遺跡では、唐津型や船野型それぞれに類似した楔形細石刃核、船底形細石刃核などが出土している。さらに好坪洞遺跡でも楔形や船底形をした細石刃核にも同様なものが見られる。韓半島の遺跡で認められる湧別技法類似の削片系楔形および非削片系船底形の細石刃核による細石刃生産技法や細石刃核の一部は、西北九州地域・九州島の細石刃核と技術形態的に極めて類似しており、これらの遺跡と註-5で上げた放射性炭素年代は、九州島の組合せ道具の出現や細石刃石器群のルーツを究明する上で参考になる。

両地域の交流で特に注目されているものに石器石材として黒曜石があり、最近、韓半島との直接的な交流を示唆する西北九州産黒曜石が、半島南部に所在する細石刃石器群の新北遺跡で発見されたとのことで、遺跡の年代は18,540～21,760BP（AMS）である（金・大谷 2009）。

楔形細石刃核による細石刃生産では、ほぼ限定されるほど結びつきが強い良質な西北九州産黒曜石は、細石刃石器群はもとより後期旧石器時代における西北九州と韓半島南部との直接的な関連性を有力に物語る数少ない重要な資料であるだけに、今後の利用例の増加を待ちたい。

以上のような韓半島では、2万数千年前から削片系細石刃核を主体にした各種細石刃核による細石刃の生産が行われており、それに剥片尖頭器・角錐状石器に示されている狩猟具に関する交流が存在する両者の関係からすれば、細石刃を組合せる狩猟具についての文化的・技術的な波が韓半島から直

接的に伝播する、九州島で受容するような交流の機会が両地域で幾度も有ったことは想像に難くない。

後期旧石器時代後半期における石器群の交流では、半島と九州島双方の自然環境に起因する行動戦略や石器装備の違い、石材環境に大きく左右される石器生産の構造などで、両地域の相異は当然予想されるが、それでいて西南日本、特に九州島の細石刃石器群のルーツを模索する上で、韓半島の細石刃石器群は欠かすことのできない視座であることには間違いがない。問題となるのは、細石刃生産技法や組合せ道具の使用法が直接あるいは間接的に、いつ頃、どのような形で韓半島から九州・西南日本に伝播したか、そして、それらをどのように選択・導入して、西北九州・九州島の各地で適応・改変したかである。

5. 九州島の「細石器文化」

ナイフ形石器文化後半期とそれに続く後期旧石器時代最終末の細石刃石器群とでは、言うまでもなく狩猟具の主体がそれぞれ異なり、示準石器の視点から時間的変遷による変化としてのとらえ方が一般的であり、基本的にはその通りである。ところがその異なる狩猟具が西北九州地域をはじめとして九州島では同一遺跡で発見される傾向が顕著に認められるのである。

日本旧石器学会の旧石器時代・縄文時代草創期遺跡のデータベース（2010）によると、佐賀・長崎両県では発掘調査や表面採集調査によって細石刃核・細石刃などが確認されている遺跡（文化層）は211件である。この中の約60%の遺跡ではナイフ形石器や台形石器が発見されているのである。これらの石器の大半は表面採集で、資料としての一括性や同時性を強く語るができないが、西北九州地域の細石刃石器群の遺跡では、ナイフ形石器・台形石器と一緒に発見されることが多い言う現象は確かに読み取れるのである。さらに、これらの細石刃石器群遺跡において、細石刃核の技術形態的な情報が解る範囲では、稜柱系の野岳型細石刃核よりも楔形細石刃核が圧倒的に多く、それも唐津型が優勢であるとの傾向も看取される（九州旧石器文化研究会 1992）。これと関連する逆な状況として、野岳型を主体にした細石刃石器群の遺跡は西北九州地域では意外と少ないのである。

ナイフ形石器・台形石器と細石刃石器群の共伴、ましてや楔形細石刃核に伴うことは決して有り得ないとの大勢の考え方に従って、時期の異なる両者が混在、文化層が重複しているとしても、また、最終氷期末の海岸線の変化が関係することを差し引いても、長崎・佐賀などの西北九州地域における遺跡の分布は、ナイフ形石器を狩猟具の主体にした集団の遺跡と細石刃石器群の主に用いる集団のそれはほぼ共通していると言える。生活の基盤をなす環境を示唆する遺跡の立地の共通性から、両者の生業・居住などの生活形態が基本的に同じであったとの理解は許されよう。さらに石材消費戦略についても、細石刃石器群がより良質な黒曜石を指向する傾向が認められながらも（橘 2009）、ナイフ形石器群と細石刃石器群では変化は認められず、いずれも各地の石材環境に適応しており、基本的に共通しているのである。このことも両石器群の関係性の強さを物語る傍証とされよう。

これに関連して、先に述べたように削片系の楔形細石刃核⇒稜柱形細石刃核の編年観を試みることで、さらに湧別技法類似の削片系細石刃核などが韓半島南部から西北九州・九州島へ伝播した時期が1,8万年前の前後に遡る可能性によって、細石刃石器群と終末期のナイフ形石器が時期的に限りなく接近することになる。するとナイフ形石器・台形石器の細石化と組み合わせ道具の刃部としての運用、さらに細石刃石器群との共伴も必ずしも否定できなくなり、西北九州地域や九州島で削片系細石刃核などによる細石刃石器群が出土している遺跡の多くで、ナイフ形石器・台形石器が発見されることや、遺跡の立地が共通する傾向にあることも理解し易くなる。

後期旧石器時代後半期から終末期における新たな狩猟具の選択・受容を意味する組み合わせ道具の出

現・展開では、刃部としてのパーツを組み合せるという道具の性格上、小型のナイフ形石器主体や百花台型台形石器にほぼ限定、あるいはこれらに細石刃が組成される、はたまた細石刃のみでほぼ単独で構成されるなど、狩猟具の多様性が発現されることになるのは至って自然である。つまり、組合せ道具の導入では、特定器種や石器組成を異にする利用法、受容時期、石材消費戦略など、ナイフ形石器文化の後半期に確立していた九州島内での地域性が一段と強まり、比較的限られた地域により、また、短いタイムスパンによって、独自の運用が図られる石器群の多様性が予想されるのである（註10）。西北九州の終末期ナイフ形石器群の特徴として「独自の石器製作システムによる地域性の顕在化」あるいは「独自の石器製作システムの一部を構成する単一に近い石器製作システムが、遺跡・ユニットとで認められる」（萩原 1995）の見解は、まさにこのような状況として理解できるのである。

後期旧石器時代後半期から終末期にかけての細石器化と組合せ道具の出現・展開に伴う石器群の多様性は、西北九州地域に限定されたものではなく、九州島の地域毎で中心的な活動域が想定される遺跡群集中分布域に（橋 2005）においても同様であったと考えられる。石器群の基本的な技術運用は各地域での石材消費を基軸にしたナイフ形石器や台形石器の細石器化、それに地域性に富む細石刃生産など、各地域で独自に構成された多様な石器群の運用に見られる細石刃石器群（橋 1985）の実態を「九州島の細石器文化」として改めて位置づけたい。この九州島の細石器文化は河川流域、台地の先端部、盆地的景観など地形的・地理的に分節化の傾向が強い比較的狭い地域での自然環境に適応する頻繁な回帰的な行動形態によって、多種多様な食料資源の利用を図っていたと推測される。各種の細石刃生産技法とその運用で特化した「古北海道の細石刃文化」が長距離移動型の技術システム（佐藤 2008）であるのとは全く対照的に、九州島では各地での石材運用技術を基盤にした各種の組合せ石器による狩猟具と限られた地域での多様な狩猟・採集活動が選択されていたとのシナリオである。（註11）。

拙稿は北方系の「細石刃文化」に対峙する多様な石器群の運用と多彩な食糧資源の活用に象徴される九州島の「細石器文化」のフレームを試みたものであるが、基本的には九州島とほぼ同じような自然環境・生態系が想定される西南日本の各地域においてもほぼ同様な細石器文化が展開し、それぞれの地域により、遺跡により特徴的な様相が顕在化した可能性が考えられる。

悔やんでも余りある福田一志君に心から哀悼の意を表し、この小文を捧げる。

註

- 註一 1 日本列島の後期旧石器時代における細石器・細石器化について、田村の興味深い見解が見られる。それは「わが国の後期旧石器時代初頭の石器群にも、細石器が確実に組みこまれていた」さらに、「後期旧石器時代とは細石器にはじまり、細石器とともに終末をむかえた、といってもいい」（田村 2011）と言うものである。後期旧石器時代後半期に発達する定型化されたナイフ形石器や百花台型台形石器などとの関係性をどのように理解すれば良いか、また、九州島・西南日本の細石刃石器群出現とどのように関わるのかなども含めての検討が必要されよう。
- 註一 2 福井7層出土資料の一端は「小石刃・小石核」と報告（鎌木・芹沢 1965）されているが、当文化層は細石刃石器群のカテゴリーで把握されるものと考え、細石刃核の技術形態の特徴は野岳型および船野型の範疇で理解し、小石刃と共存していると考え。
- 註一 3 九州島の細石刃石器群の時期について、草創期の土器に伴う楔形細石刃核の存在はまぎれもない事実であるが、それと共に土器を伴わない楔形細石刃核や茶園型・位牌塔型の稜柱系細石刃核に先行する削片系楔形細石刃核などによる細石刃石器群の存在を想定している。関連して小型ナイフ形石器や台形石器が組合せ道具の刃部として利用されたと考えている。この視点に立つことで、西北九州をはじめ九州島内で細石刃石器群とナ

イフ形石器・台形石器と一緒に発見される遺跡が多い傾向や後期旧石器時代後半から終末にかけての石器群構造の理解を深化することができるとの見通しを持っている。なお、九州島の楔形細石刃核の位置づけについては別稿を準備している。

- 註-4 楔形をした細石刃核については「唐津型」(織笠 1983)、「九州におけるもう一つの削片系細石核」(岡本 2002)、「石ヶ元型」(小畑 2008)として知られ、また、「湧別方式」の蘭越技法の変異としての理解(佐藤 2010)もある。
- 註-5 李などの考え方による削片系細石刃生産の一つの流れ「公州石壮里遺跡⇒丹陽スヤング遺跡⇒スン州曲川、和順大田遺跡⇒日本九州地方」と、韓半島での放射性炭素法による年代-石壮里遺跡20,830年±1,880年 BP、スヤング遺跡の18,640BP、16,400BP(李・尹 2005)、好坪洞遺跡の19,000年前(AMS 暦年較正)(松藤 2010)、24,100±200BP~16,190±50BP(金 2009)などが参考になる。
- 註-6 加藤(2010)によると、華北地域では「クサビ形細石刃核」をもつ細石刃文化が2回にわたって拡散し、福井型細石刃核は1,5万年前に始まる「華北に2回目に広がる細石刃文化のものと類似する」とし、東アジアにおける土器の拡散と連動している可能性を示唆している。問題としたい1回目の拡散は約2~1,8万年前で、ロシア極東地方から中国東北部を經由して華北へとのことなので、その延長線上で韓半島における細石刃石器群の遺跡と、その放射性炭素年代を介することで、削片系楔形細石刃核の唐津型が九州島へ伝播・波及した時期については、1,8万年前の前後の可能性が高くなる。
- 註-7 組合せ道具・細石刃石器群の出現時期については、ナイフ形石器文化後半期や唐津型細石刃核を主体にした遺跡の放射性炭素法による年代測定値が無いため明確にしえないが、韓半島の削片系楔形の細石刃核、船底形の細石刃核との直接的な関係性が働いていると考えている。それとは別の視点で、韓半島での細石刃核の主体は削片系の舟底形であり、九州の旧石器時代段階の細石刃核とは異なることから、「朝鮮半島からの伝播は考えにくい」(萩原2011)との認識もある。
- 註-8 韓半島から伝播したと考えられている槍先形尖頭器については、剥片尖頭器(松藤1987)、角錐状石器(佐藤2010)、それに三稜尖頭器(木崎1996)がある。おそらく複数回にわたって各種の槍先形尖頭器が九州島にもたらされているので、韓半島から組合せ道具の使用法を導入する機会も何度か存在したと推定される。九州島、特に西北九州の後期旧石器時代後半期石器群の主体はナイフ形石器(台形石器)で構成されており、大型~中型の狩猟具である槍先形尖頭器に比較して相対的に小形・扁平・軽量なことから、大型~小型の狩猟具のパーツとして組合せて使用することは大いに考えられよう。ちなみに、長崎・佐賀両県で発掘・表採で確認されている槍先形尖頭器の遺跡(文化層)は67件で、それに対してナイフ形石器のそれは372件、細石器・細石刃核は211件であり、後者が狩猟具としての槍先形尖頭器の補完を示唆しているような現象である。(日本旧石器学会の旧石器時代・縄文時代草創期遺跡のデータベース(2010))。
- 註-9 組合せ道具の出現について、白石(2010)は細石刃石器群以前の槍先形尖頭器・ナイフ形石器に着目して「少なくとも二側縁加工のナイフ形石器が登場するおよそ29,000年前頃まで組み合わせ道具による槍先形狩猟具が遡る可能性があろう」と興味深い見解を披露している。
- 註-10 松本(2005)は“ナイフ形石器文化終末期”多様性について「大形利器受容の低減」が関わると、さらに石器の小形化の現象は「大形利器が必要とされなくなった石材利用の変化」と、「利器」に視点おいた解釈がある。
- 拙稿では九州島の後期旧石器時代後半から終末にかけて見られるナイフ形石器・台形石器の小形化・細石器化、それに細石刃など、石器群の多様性については、多様な各種のパーツを用いた組合せ道具の出現・展開によるものと考え、組合せ道具による大型~小型の利器(狩猟具)の存在を想定している。
- 註-11 佐藤(2000)は後期旧石器時代後半期における北海道と九州島との「石器群の技術運用=行動戦略仮説」で、北海道の細石刃文化の特筆を上げ、九州島との相違を想定している貴重な見解が見られる。

【主要引用・参考文献】

- 麻生 優・白石浩之 1976「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』3 雄山閣
- 鎌木義昌・芹沢長介 1965「長崎県福井岩陰」考古学集刊3-1 東京考古学会
- 岡本東三 2002「九州島の細石刃文化と神子柴文化」『泉福寺洞穴研究編』 泉福寺洞穴研究編刊行会
- 小畑弘己 2008「朝鮮半島の細石刃石器群と九州の細石刃文化」『伝播を巡る構造変動-国府石器と細石刃石器群』 東京大学公開シンポジウム 予稿集
- 織笠 昭 1983「佐賀県原遺跡」『探訪先土器の遺跡』有斐閣

- 織笠 昭 1991「西海技法の研究」『東海大学紀要文学部』54 東海大学文学部
- 木崎康弘 1996「槍の出現と気候寒冷化—地域文化としての九州石槍文化の提唱」『旧石器考古学』53 旧石器文化談話会
- 加藤真二 2010「小さな石器の大きな物語」奈良文化財研究所飛鳥資料館平成22年度夏期企画展図録 飛鳥資料館
- 鎌田洋昭 2004「九州における細石器文化開始期について—ナイフ形石器文化終末期の様相を踏まえて」『九州旧石器』8 九州旧石器文化研究会
- 金 尚泰・大谷薫(訳) 2009 「韓半島細石刃石器群研究の成果と展望」『旧石器考古学』72 旧石器文化談話会
- 佐藤宏之 2000「日本列島後期旧石器文化のフレームと北海道及び九州島」『九州旧石器』4 九州旧石器文化研究会
- 佐藤宏之 2008「環日本海地域における細石刃石器群研究の〈伝播〉と構造変動」『伝播を巡る構造変動—国府石器と細石刃石器群』 公開シンポジウム 予稿集
- 佐藤宏之 2010「東アジアにおける削片系細石刃石器群の伝播」『比較考古学の新天地』 同成社
- 芝康次郎 2010「九州における細石刃石器群研究の現状と課題」『旧石器考古学』73 旧石器文化談話会
- 下川達彌・萩原博文 1997「細石刃石器群の出現・展開と泉福寺洞穴」『人間・遺跡・遺物』3 発掘者談話会
- 白石浩之 1978「西南日本のナイフ形石器終末期の予察」『神奈川考古』第3号 神奈川考古同人会
- 白石浩之 2010「旧石器時代後半期の槍先形狩猟具—組み合わせ道具から試論—」『旧石器研究』第6号 日本旧石器学会
- 杉原荘介・戸沢充則 1971「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」『考古学集刊』4-4 東京考古学会
- 橋 昌信 1985「九州における先土器時代石器群の編年と地域性」『論集日本原史』吉川弘文館
- 橋 昌信 1998「長崎県のあけぼの—旧石器時代—」『原始・古代の長崎県』通史編 長崎県教育委員会
- 橋 昌信 2005「西北九州産黒曜石の流通と遊動領域」『地域と文化と考古学』I 明治大学考古学研究室
- 橋 昌信 2009「九州島の細石刃石器群における西北九州産黒曜石の流通」『駿台史学』135 駿台史学会
- 田村 隆 2011『旧石器社会と日本民俗の基層』同成社
- 戸沢充則・富樫憲次 1962「佐賀県・原遺跡の石器群—唐津周辺の細石器—」『考古学手帳14・16』
- 萩原博文 1995「平戸の旧石器時代」『平戸市史』自然・考古編 平戸市
- 萩原博文 2011「ナイフ形石器群の編年研究に向けて」九州旧石器14号 九州旧石器文化研究会
- 松藤和人 1987「海を渡った旧石器“剥片尖頭器”」『花園史学』8
- 松藤和人 1989「小型ナイフは組み合わせ石器か？」『旧石器考古学』38 旧石器文化談話会
- 松藤和人 2010「東アジアを席卷した細石刃革命」『日本と東アジアの考古学』雄山閣
- 松本 茂 2005「九州地方の“ナイフ形石器文化終末期”とその前後」シンポジウム「ナイフ形石器文化終末期」再考予稿集『石器文化研究』12 石器文化研究会
- 李 隆助・尹 用賢 2005「韓国細石刃石核の研究—垂楊介手法との比較を中心に—」『考古学ジャーナル』527 ニュー・サイエンス社
- 日本旧石器学会 2010「長崎県・佐賀県」『日本列島の旧石器時代』
- 九州旧石器文化研究会 1992『九州旧石器時代関係資料集成—細石器文化編—』I

紙面の関係で報告書類については掲載してなく、ご寛容願いたい。